

# 和紙

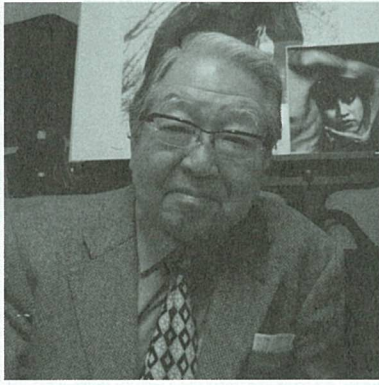
## だより

### ■目次

越前和紙への提言 細江英公さん	1
活動紹介 日本和紙造形研究所	2
取組紹介 越前女紙倶楽部	3
和紙ミニコーナー・情報欄	4

### 越前和紙への提言

■細江 英公(ほそえ えいこう)  
1933年山形県生まれ。本名・敏廣。清里フォトアートミュージアム館長。18歳の時に「富士フォトコンテスト学生部」で最高賞を受賞し、写真家を志す。54年東京写真短期大学(現東京工芸大学)卒業。56年小西六ギャラリーで初個展。63年、三島由紀夫をモデルに撮った「薔薇刑」で評価を確立。70年、舞踏の創始者・土方巽を撮った写真集「鎌鼬(かまいたち)」で芸術選奨文部大臣賞受賞。98年、紫綬褒章。2003年、英国王立写真協会創立百五十周年記念特別賞、2010年文化功労賞など、国内外で高い評価を得ている。



### 細江英公さん(写真家) 「写真芸術と和紙の可能性」

#### ●化学から物理へ

写真術の発明は一八三九年、フランスですが、当時その多くは記録媒体として利用されました。その後、フランスが先頭となり、イギリス、アメリカなどの国で肖像画に替わる気軽な肖像写真が一般性を持つようになり、さらに写真が自立した芸術作品になるのだという考えを持つようになりました。二十世紀に入ると、写真は美術館の壁面を飾り、同時に作品コレクションとして扱われるようになります。日本では、写真は日常的で実用的、自分が関わることでできる生活に必要なものとして認識されているので、芸術の対象として鑑賞する人はそれ程多くはありません。

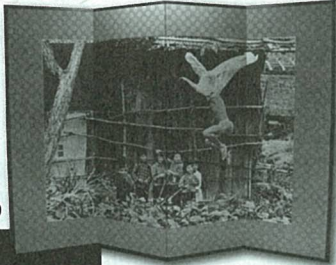
写真はカメラという機械を通し、化学的な技術を使つて現像するわけですから、絵ではできない独特の表現があります。特に写真家が作品を展覧会などに展示する時は、自分の作風とびつたり合った風合いの印画紙が欲しいのです。表面をピカピカにするためのフェロタイプという技術は特に印刷のための写真原稿用で、家庭用のアルバムに貼る記念写真とは別物です。しかしデジタルプリントの普及で、印画紙が使われなくなりました。印画紙のマーケットははや九九%はなくなつてしまつたのではないのでしょうか。かつて世界一の写真材料メーカーだったコダックは経営が悪化、イギリスのイルフォードは青息吐息。日本では小西六、富士フイルムがありましたね。コピー機や化粧品等に活路を見出していますね。ゼラチン乳剤で作つた印画紙は化学工場で作られる工業製品です

から、個人では作れません。写真の在り方が大きく様変わりし「化学から物理」の時代となつたのです。

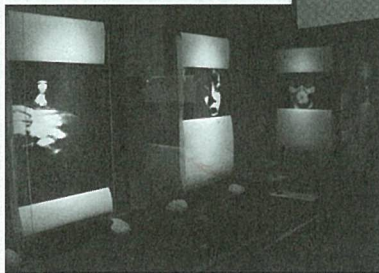
#### ●写真表現の幅を広げる和紙プリント

和紙でプリントしてみたいなあとは、ごく早い時期から考えていました。私の家が神社にあり、父親は浮世絵のコレクションをしていましたので、和紙はごく自然な存在でした。ですから、和紙には懐かしさと誇りを感じると共に、高級なイメージも持っています。

現在、昔のような印画紙の写真を展覧会に出そうと思うと、特注で高いお金を出してプロ用のラボでプリントしてもらうか、自分でできる範囲のものに限るかです。反対に、デジタルプリントが出現したことによって、今までできなかった表現方法が比較的簡単にできるようになりました。印画紙にプリントし、額に入れて展示するのではなく、たとえば、版画的な作り方を工夫することで、見せ方を工夫することができそうです。先日「京都グラフィィー」写真フェスティバルで高



「Kyotographie」写真フェスティバル-高台寺円徳院に展示された和紙プリント作品(2013年春開催)



台寺円徳院に出した作品は、襖や屏風に仕立てたり、布のように垂らしたり、軸状にして寝かせて展示しました。

私が「写真絵巻」と呼んでいる作品は、和紙でなくてはできない作品で、ストーリー性が表現できません。木版画に専門の「摺り師」という職人がいるように、私も和紙に印刷する時にはチームを組んでいます。和紙染摺りは木田俊一氏、表装は天草仁司氏が、「細江英公写真絵巻制作チーム」です。純日本的な空間で展示するのも勿論合いますが、二〇〇九年には、イタリア・ルッカ・デジタル・フォト・フェストの招待作家作品として十五世紀に創建された貴族の館で展示されました。フレスコ画のある五部屋の全長二〇メートルの壁面に「おとこと女」「薔薇刑」「鎌鼬」「ガウディの宇宙」「浮世絵うつし」などの写真絵巻が展覧され、イタリア人の美術評論家などはそのハーモニーに感動して、いい批評を書いてくれました。

#### ●和紙写真のこれから

和紙は、日本人としては文化的にも馴染みのある素材ですが、まだまだ日本の写真家にも



ルッカの貴族の館に展示された和紙プリント作品

■日本和紙造形研究所  
「和紙を通して自己表現を求める人達の拠点」

東京駅から約一時間四十分、武蔵五日市駅からクルマで十五分ほどの緑深い西多摩郡日の出町で、生き方やアートを通して、和紙の新しい可能性を切り拓こうとしている「日本和紙造形研究所」がある。敷地は自宅を含め、二二〇〇坪。小鳥の声も賑やかな庭で、代表の國高ひできさんにお話を伺う。

●和紙造形大学から始まった和紙アート

國高さんは、グラフィックデザイナーを経て、紙漉きや和紙アートを「世田谷区和紙造形大学」で学んだ。この大学は、美術教師であった小野貞司さんが始めたもので、群馬県川場村



代表の國高ひできさん  
http://washizokei.jp

にある世田谷区の保養施設に年に八回、二泊三日で宿泊し、和紙造形の基礎(染め方、型作り、裏打ち、作品の仕上げなど)をみっちり教える体験教育で、一九八五年から二三年間続いた。ここを卒業した國高さんは、引退した師の活動を引き継ぎ、指導者として同大学のカリキュラムの作成や展覧会の企画などに携わり、二〇〇五年に「日本和紙造形研究所」を設立、二〇二年、この日の出町に移り住み、新たな拠点を作つた。

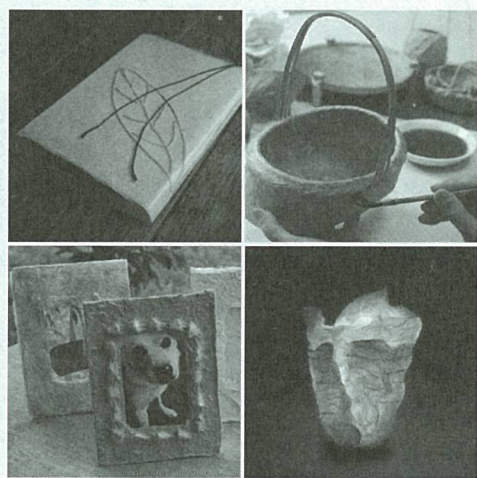
「和紙造形大学では朝から晩まで、そのことだけに集中して学ぶので、四月から始まって三月に卒業する頃には、普通の主婦だった人が立

知られていません。聞くところによると和紙の乱反射の光や透過光は心理学的にも癒し効果があり、エコで、保存性・耐久性もある形態も変化でき、歴史も古くストーリーのある文化的な素材なので、世界マーケットに打つて出る方法はいくらでもあるでしょう。まず、日本の写真家が使つて、それを見てフランスやアメリカの写真家を使うという風に持つていかないと、彼らが先にやったのでは恥ずかしい。日本の写真家が、「最先端のテクノロジ」と最古の和紙の結びつけ、現代の写真の世界観を変える」と。和紙を提供してくれる協力者を得て、複数の写真家と海外の美術館や画廊でユニークな和紙写真展など企画できれば、大きな話題になりますね。そうすれば「この作品はこの産地の誰が漉いた楮紙」という具合にクレジットも入れることができそうです。考えるとワクワクしますね。僕はそういう写真家の役割を果たしたいなあ。家庭で和紙写真を楽しむような場合は、軸にして家系図ならぬ、家族の写真などにとすると、子から孫に伝えていく面白いツールに仕立てることができるとも思いますが、そんな「古い写真」で終わらないために、必ず撮影年月日と場所を記録しておくというと思いますよ。

「人間ロダン」展(2013年5/17~6/15)では、人間国宝、岩野市兵衛氏の紙に染め摺り技法でプリントした作品も展示。



派な作家なのです。参加者は、紙を作るのが目的ではなく、和紙を自己表現や創作の手段として捉えている人達で、合宿という形態は生徒同士の繋がりを親密にし、結束を強くしました。」と國高さんは振り返る。卒業生は期毎に平面、具象、抽象等の作品発表を世田谷美術館で行い、地域に向いてワークショップも行うなど、活躍している。



クラフト工芸コースの制作アイテム例

●和紙造形アトスクール

当研究所の軸となる活動の一つが「和紙造形アトスクール」だ。「新しい紙漉き」を標榜しているのが、紙漉き専門用語は意識的に使わず、例えば、ネリの入った「紙料」は「素材」と呼ぶ。染色した楮を使い、紙漉きで絵を描く。

和紙アートの技法を学ぶ「本科コース」(初級・中級・上級・指導者養成、各十二単元)、一閑張り、和紙あかり、写真立てなど、毎回異なる和紙雑貨を制作する「クラフト工芸コース」(全十二回)、紙漉きの原理や楮(こうぞ)の特質を理解して、オリジナルの立体(インスタレーション)制作を学ぶ「和紙造形立体コース」(全十二回)の他、一回ぎりの「体験コース」など

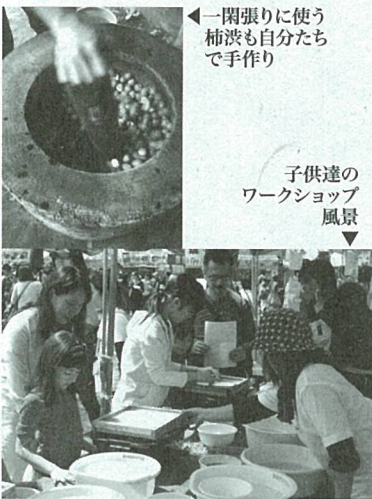
が用意されている。入会金二万円、一コマ二時間、三千元。教室は二ヶ所。恵比寿教室では第一木・土曜日、日の出教室では第三木・土曜に、それぞれ二コマずつあり、どちらの教室で学んでもよいので、一ヶ月に八回学ぶチャンスがあるという計算になる。

生徒はそれぞれのペースで履修する単位制を取つているため、教室での授業は一律ではなく、個人個人の進み具合に応じた指導がなされる。各人の進み具合を把握していなければならぬので、授業の準備は大変だが、同じ教室に、初級コースの三単元目の人もいれば、上級の五単元目の人もいれば、クラフトコースの一閑張りを作つている人などが同時にいて、お互いの様子を観察でき、刺激になるといえる。現在、本科・クラフトコースでは名古屋、大阪、仙台からも通つてくる人も含め、八名が学んでいる。

●多彩な和紙造形ワークショップ

和紙造形体験ワークショップは、もうひとつの活動軸。商業施設や町のイベントでの子供、親子参加型のイベントが多い。家紋を漉き込む和紙アート作り、タオルで漉く和紙あかり作り、葉を漉き込むブックカバー作りなど、多彩で工夫したプログラムが用意されている。

「私のやつている新しい紙漉きは、大がかりな



一閑張りに使う楮も自分たちで作る

子供達のワークショップ風景

## 取組紹介

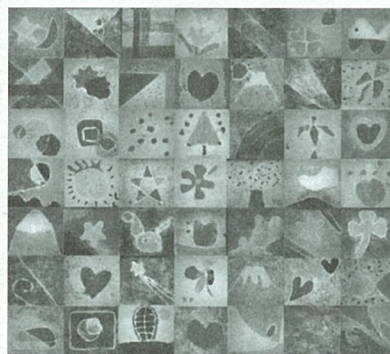
### ■「越前女紙(めがみ)倶楽部」 豊かな紙環境を女性目線で活かす

道具が必要ないので、持っていく道具は、素材を混ぜる洗面器、プラスチックの舟、支え棒と、赤・黄・青の三原色と黒に染色した楮、ねり剤、それに紐などです。紙作りから始まり、混色も自分で行うのが、面白がられているようです。」

二〇二二年には、東北被災地支援のために、関東をはじめ各地で「応援の気持ちを紙漉きで漉き込もう」というワークショップを開催し、完成した二、三〇点の作品を四×四畳の大きなタピストリーにして、クリスマスに仙台空港ターミナルビルで展示と紙漉きワークショップも行った。

地元日の出町では、付近に自生する楮で「ご当地和紙」を作り、町おこしができないかと、觀光まちづくり事業にも参加している。今年も町民と楮一五〇株を裏山に植えた。できた楮紙は、殊の外、質がよく、光沢がありツヤもよいそうだ。

「いわゆる伝統的な紙漉き業はその道の方におまかせして、僕は、これまで和紙に関心のなかった若い人達にも興味を持ってもらえるよう『新しい紙漉き』を提案しているのです。現代の生活スタイルにあった、身近な紙漉きを広めることで次の時代の和紙文化の底上げや震災被災地支援の大きな和紙タピストリー



新しい展開に目を向けたい。」と語る國高さんは、卵も食べない純粋菜食主義者だった。

昨年十月二十四日、越前和紙の製造や販売に関わる女性達が、ブランド発信や新商品開発をしようと「越前女紙倶楽部」を結成した。二五〇五九才の総勢十八名の女性達は、福井県和紙工業協同組合の組合に登録している漉き場の経営者の奥さんや従業員。和紙ファンの多い女性をターゲットに、ユニークな商品作りや活動を行っている。事務局長の石川靖代さんと情報担当の山田京代さんにお話を伺う。

#### ●結成のきっかけ



情報担当の山田京代さん



事務局長の石川靖代さん

「女紙」というネーミングは、この地に紙の神様として祀られている「川上御前」に因んでいる。結成後、雑誌媒体、テレビ、ラジオと取材も相次ぎ、殊の外反響が大きい。

メンバー十八人のうち、若い頃から和紙に囲まれて育った地元出身者は三人。大半の女性は紙のことも何とも知らず、外からお嫁に来た人や紙漉きになりたくて住み着いた人達だ。全国には農協や漁協の女性グループも多いがこの倶楽部のように三、四十代の女性が主力となつて例は少ないという。定例・作業会合は月に数回。家業の仕事を終え、夕食の準備や子供の世話した後、女達は夜七時頃から集まる。

「最初は、パピルス館で売れる商品を女性の視点で作つてはという要望があり、まずはデザインや県の観光課の人、お土産ショップの経営者などをお呼びして勉強会から始めたのです。何回か話し合いを重ね、せっかくなので集まるのだつたら、越前和紙という名前をより多くの人に知ってもらおう活動の上に、事業や商品開発も組み立てては、ということで見解が一致し、まずは忘年会の日取りを決めました。」(笑)。

#### ●手元にいつも紙があることの強み

紙の産地には、廃棄してしまう端紙や損紙が多く出る。捨てるのはもったいないと考えるのは、どこの産地でもまず家計を預かる女性達だ。各自、まず自社で作つている紙を持ち寄つた。手漉き、機械漉き、色紙や揉み紙、落水、ひっかけ、バラエティのある紙を目の前にして、損紙で越前のPRにもなる女性観光客向けのお土産を作ることを思いついた。十五社から提供された和紙をB6サイズに折り、束ねて、紙祖神岡太・大瀧神社の写真や謂われを載せ、ゴールデン・ウィークを機に「越前和紙めぐり」ノートを発表した。



女紙倶楽部の商品開発第一号「越前和紙めぐり」ノート

「自社の紙だけでは面白いものが作れないし、みんなの紙を集めればバラエティがあつて、いいものが出来ると思つた。ここは観光バスで来る客が多いので、滞在時間が限られている。取りあえず眺めて、お土産にと買って帰つて、家でじっくり見てみると川上御前の伝説や見学できる漉き場の情報も載つている。今度はお友達と自家用車で訪れてみようかな、と思える

ものを作りたかつたのです。」と、石川さんとはなかなか女心を讀むのがうまい。ノートのデザインや束ね方、綴じ方もみんな集まって話し合うと、よりいいものが出来る。

また二月、会員の一人から、ライスシャワーならぬ和紙の(折り鶴シャワー)で祝う活動が提案された。やるなら最初は地元で行いたいと思つていたところ、丁度組合員さんの息子さん結婚式を大瀧神社で挙げる事となった。損紙で色とりどりの鶴を千羽折り、紙のオリジナル・バスケットも十個作り、四月二十日、初の結婚式セレモニーで新郎新婦の門出を晴れやかに演出した。反応は上々で問い合わせも多い。倶楽部では、大瀧神社で結婚式を挙げる人のプレミアとして定着すれば、産地の宣伝になる上、会員もすぐには参じることができ、無理のない持続的な活動になると考へている。

気軽に集まることのできる地の利と、いつも和紙に囲まれている産地の利を活かした活動だ。

#### ●産地力アップのいい機会

多くのメーカーには得意分野がそれぞれあり、会員の個性が活動に活かされる。「商売上は、競合関係になる場合もあるのでは？」との質問に「かえつて刺激になり、家業に益するところが多い」との答えが返ってくる。

「会の規約を作る時、私達の活動は利益中心



折りづるシャワーでお祝い演出



「マルシェワンダーランド」の準備。体力を上げていくには、いい訓練の場となるのです。商品が売れたら活動資金としてプールしていき、次のアクションに活かしていきたい。」と石川さん。

とかく伝統産業のIT力が弱いのは指摘される所だが、結婚する前はこの分野の仕事をしていたという山田さんは、すぐに当会のフェースブックを立ち上げ、ネット通信に弱い女性達を導いてきた。電話で「ここにメルアドを入れて、パスワードを入れて」と使い方を気軽に伝授し、ネット環境を扱えるメンバーも増えてきた。

一方、課題もある。デザインやプロデュース力の不足については、会に賛同しアドヴァイスや協力を仰げる「フレンドリーパートナー」を募り、お付き合いの中で徐々に体制を整えていくことが出来れば、と考えている。

六月には越前陶芸村越前陶芸公園で開催されたクラフト市「マルシェワンダーランド」に参加。年末に向けてのお歳暮商品や平成二十七年新幹線金沢開通に伴う温泉地向け商品作りも進行中でメンバーは張り切っている。

## ■ふくい南青山291で「うつす和紙」展

去る六月十日〜十六日、東京都南青山にある福井県のアンテナショップ「ふくい南青山291」二階特設会場で、「うつす和紙」展「越前和紙がうつしだす現世（うつしよ）写真、映像、アートが開催された。

ニューヨーク在住の写真家、棚井文雄氏の作品が越前和紙にプリントされ展示。氏は、東京工芸大学在学中、写真家細江英公氏に学び、同大助手時代には、歌舞伎、映画俳優、小説家などの撮影を通して日本文化への理解を深めた。今回、福井を舞台に撮影を始め、人間国宝岩野市兵衛氏や紙職人達の働く工房風景、和紙などを撮り、空気感のあるモノクロ写真を発表。六月十五、十六日には、棚井氏のトークショーも行われ、越前の風土と自作品、和紙プリントの特徴や難しい点などを語った。

会場では、昨夏越前市「和紙の里」で開催された「×和紙」(かけるわし)展の作品「和紙工房を撮ったシリーズ」も展示。和紙スクリーンに紙の持つ意味を問う映像作品を映し出したインスタレーションや福井県和紙工業協同組合青年部会のメンバーによる新しい紙加工の試みやアート作品が並んだ。



棚井氏のトークショー

青年部メンバーの作品

## 情報欄

### ●イベント報告

■第42回 金沢ペーパーショー  
時:2013年6月7日(金)〜9日(日)  
場所:石川県産業展示館(3号館)  
越前和紙の漉き場や青年部会メンバーの新しい試みを展示。また和紙製品の販売コーナーや、わしのぎょうすのワークショップ、紙漉き体験コーナーも人気で、多くの方に和紙に親しんでいただきました。

わしのぎょうすの組み立てに挑戦する来場者



### ●イベント情報

- 絵てがみ展  
時:6月14日(金)〜7月7日(日)  
場所:卯立の工芸館
- 越前市岡本小学校5年生「流し漉き体験」  
時:7月4日(木)  
場所:卯立の工芸館 伝統工芸士が指導します。
- 福井伝青展「ふくい若手てづくり展2013」  
時:7月18日(木)〜8月11日(日)  
場所:ふくい工芸舎(福井市)
- 越前市小学校卒業証書漉き体験  
時:7月18日(木)〜8月29日(木)  
場所:パピルス館 伝統工芸士が指導します。
- 「第5回越前和紙七夕吹き流しコンテスト」作品展  
時:7月12日(金)〜28日(日)  
場所:越前市いまだて芸術館
- 漉織り展  
時:7月13日(土)〜8月19日(月)  
場所:卯立の工芸館
- 和紙の里夏まつり 河濯さんまつり  
時:8月3日(土)・4日(日)  
場所:和紙の里通り
- おもしろフェスタ in サンドーム福井2013  
時:8月3日(土)・4日(日)  
場所:サンドーム福井(越前市)
- 郷土の民藝展  
時:8月24日(土)〜10月14日(月)  
場所:卯立の工芸館
- 丹南産業フェア2013  
時:9月21日(土)〜23日(月)  
場所:サンドーム福井(越前市)  
展示・即売・体験あり

### 編集後記

建築家・藤井厚二(1888〜1938)が設計した日本で発のエコ住宅と言われている京都府大山崎町の「聴竹居」を見学した。藤井は生涯「真に日本の気候・風土にあった日本人の身体に適した住宅」を追い求め、この家は彼の5回目の実験住宅。和洋折衷の達人でもあったので、モダンな空間の和紙の使い方もうまいが、天井や壁には燃えにくく寺社建築によく使われたという泥入り名塩和紙が使われていた。昔の建築家の和紙の知識に敬服。(よ)

季刊・和紙だより 第39号(2013年夏号) 発行日:2013年7月10日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。